



ルリホコリ 写真:高野 丈

企画展

令和2年6月6日(土)～7月5日(日)

2 輝いていた60's -1960年代のスポーツと生活文化-

企画展

令和2年7月18日(土)～8月30日(日)

3 こんにちは変形菌！とってもふしぎな生きものです。

4 [美術] 新収蔵品紹介 ひじかた すげうら 土方(杉浦)家伝来資料の寄贈

5 [美術] コラム 美術館改修あれこれ

コラム 『Pass me!』を発行しています。—「美術館ができるまで」を伝えるフリーペーパー

6 [自然] コラム コレクションは何を語るのか～三島寿雄チョウ類コレクションを例に～

7 [人文] 資料紹介 うべ じんじゃきょうづか きょうづつ 宇倍神社経塚出土の経筒について

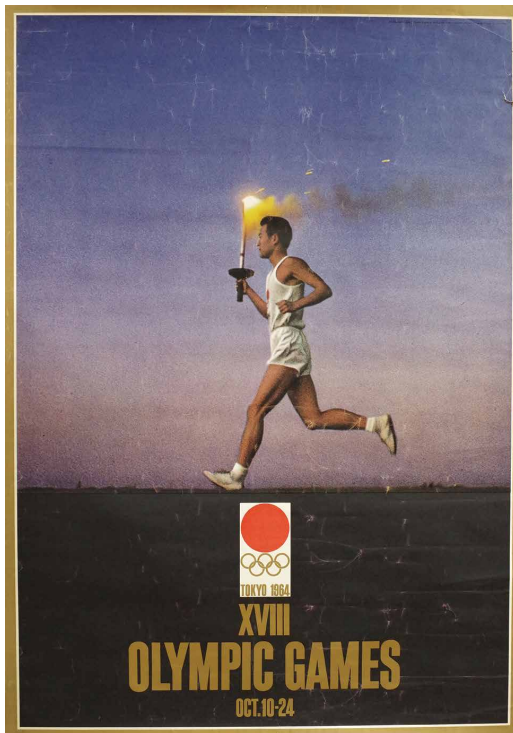
8 美術館準備室コラム、お知らせ



東京オリンピック

今年(令和2年)は、いよいよ2回目の東京オリンピックの年です。昭和39年(1964)、アジア初の開催となった同大会はこの時代を象徴する国民行事であったといえるでしょう。

実は、東京大会には鳥取県出身の選手が2名参加しています。このうち陸上競技(走り幅跳び)で出場された岸本幸子さん(鳥取市)ゆかりの資料を展示します。また、県内でも行われた聖火リレーを当時の記録から振り返ります。そして鳥取県の歴代オリンピックもご紹介したいと思います。



東京オリンピック公式ポスター第4号

戦後復興から豊かな時代へ

昭和30年代後半から40年代に高度成長期を迎えた日本の経済は、それまでの伝統的な生活様式を一変させました。これまでの日本の伝統的なものづくりから工場での大量生産となり、日本の住宅事情、夢のマイカー時代、お茶の間へのテレビの浸透など生活様式や社会状況は変容しました。56年経った現在の日本の発展も、この時代から始まったといっても良いでしょう。

全国的には東名高速道路と東海道新幹線が開通しましたが、鳥取県内でも鉄道駅や飛行場の整備が行われました。そして、いわゆる昭和モダンな建築がみられるようになったのもこの時期です。

展示イメージ



わたしの60年代

この展覧会では、日本と鳥取県の1960年代の出来事、当時の生活資料を紹介します。そして、日本有数の昭和家電コレクターである富永潤さん(三重県伊賀市・昭和ハウス館長)のコレクションを展示します。あわせて県民から提供を受けた「思い出の品」も紹介します。

いつもの博物館特有の「古めかしい」展示物ではなく、当時を経験した方なら「あった、あった」という資料が並ぶことでしょう。「60年代」を知る世代には懐かしく、知らない世代はわくわくする、ひと昔前の豊かな時代「昭和」を体感していただく展覧会にしたいと思います。

(学芸課 富永 潤 氏)

- 休館日: 6月22日(月)
- 観覧料: 一般/500円(団体・前売/300円)

関連イベント

いずれも午後2時～

- 6月7日(日)・7月5日(日) 昭和ハウス・富永館長の昭和レトロ講座 講師: 富永潤氏(要申込)
- 6月14日(日) 講演会「鳥取県のオリンピック―陸上競技選手を中心に―」
講師: 油野利博氏(鳥取大学名誉教授・公益財団法人鳥取県体育協会名誉会長)
- 6月21日(日) 講演会「オリンピックがくれたもの」
講師: 大杖正彦氏(札幌オリンピック出場スキー選手)
- 6月28日(日) 歴史講座「60年代の鳥取市街地をぶらり」講師: 当館学芸員(要申込)



デパートの屋上などにかつてあった遊具

こんにちは変形菌！とってもふしぎな生きものです。

令和2年7月18日(土)～8月30日(日)

(主催) 変形菌展実行委員会

今年の夏の企画展では、とってもふしぎな生きものを紹介します。その生きものとは変形菌！変形菌は動物でも植物でもなく、「菌」の字がつき胞子で仲間を増やしますが、菌類(カビやキノコ)や細菌(バクテリア)の仲間でもありません。近い仲間はアメーバです。アメーバ状の姿からキノコのような姿に変身し、体の形を変えるので変形菌と呼ばれています。

今回は、変形菌の一生の中でも、野外で見つけやすいアメーバ状の姿(変形体)とキノコ状の姿(子実体)について、展示内容に触れながら紹介します。

動く変形体

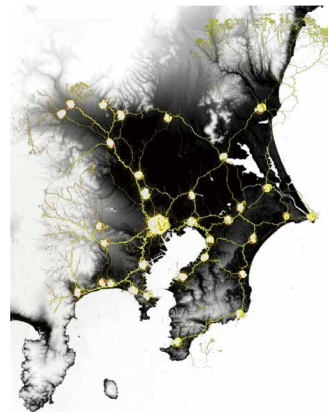
変形菌のアメーバ状の姿を変形体と呼びます。条件がよければ大人の手のひらより大きくなります。このとき、どんなに大きく育っていても1つの細胞です。色も赤や黄色、白色と種類によって様々です。自然の中の変形体は1時間に1cmほどのスピードでバクテリアや菌類などを食べながら移動しますが、一部の種類は穀類を餌にして飼育できることが知られていて、展示会場では生きた黄色い変形体をご覧いただく予定です。

きれいな子実体

変形体は一定の条件がそろると、変身して小さなキノコのような体をたくさんつくって胞子を飛ばします。この姿を子実体といいます。子実体の色や形も種類によって違います。近年、多くの変形菌の写真集が発売され、その美しさがより多くの人に知られるようになりました。美しい金属光沢をもつ種類や繊細なランプシェードを思わせる種類など、色や形の多様性には息をのむばかりです。展示会場では、様々な子実体の実物標本をはじめ、1,000倍の拡大模型や写真のほか、変身の様子を動画で紹介します。

かしこい変形菌

写真は変形菌が描いた関東地方の道路交通網です。関東地方をかたどった培地の上で、主要都市に変形菌の餌を置いて変形体を放すと、実際の交通網にそっくりなネットワークを完成させます。いよいよもってふしぎな生物です。展示では、変形菌が



変形菌がつくったネットワーク
公立はこだて未来大学 准教授高木清二博士 提供

迷路の最短距離をみつける実験や、変形菌の心を持ったムカデ型ロボットなど、理工分野で役に立っている変形菌の今日的な姿も紹介します。みなさんも変形菌になったつもりで迷路に挑戦できます。

この夏の変形菌展はとってもふしぎ、とってもカラフル、とってもビジュアル、とっても体験的です。

(学芸課 清末 幸久)



ツヤエリホコリ 写真:高野 丈



タマモチモジホコリ 写真:高野 丈

- 休館日:会期中無休
- 観覧料:一般/700円(団体・前売・大学生・70歳以上/500円)

関連イベント

- 7月25日(土) 午後1時～
講演会「ときめく変形菌」
講師:高野丈氏(自然写真家)
講演会「単細胞の賢さを探る」
講師:中垣俊之氏(北海道大学 電子科学研究所所長・知能数理研究分野教授)
- 8月1日(土) 午前10時～、午後2時～(要申込)
ワークショップ「リアル変形菌フィギュアをつくらう」
講師:今村知世子氏(日本変形菌研究会会員)
- 8月2日(日) 午後2時～
トークライブ「世界は変形菌でいっぱいだ フシギでカワイイ変形菌のお話」講師:増井真那氏(変形菌研究歴13年の大学生)



土方(杉浦)家伝来 資料の寄贈

きっかけは平成30年に当館で開催した「鳥取画壇の祖 土方稲嶺」展でした。昨年(令和元年)の夏、「稲嶺の展覧会が開かれたと聞いた。稲嶺の肖像画と資料を持っている」とのお電話があり、お話を伺うと、なんとその方は稲嶺のご子孫であるとのこと。早速その資料をお送りいただき、箱を開封すると、中には大量の資料とまぐりの小さな絵が1点。その小さな画面に描かれた老齢の男性こそ、稲嶺その人でした(写真1)。文人的な清廉さを感じさせる佇まいに、口を真一文字に結び、静かに何かを見つめる眼差しには鋭さが感じられます。現在確認されている唯一の肖像画であり、おそらく稲嶺晩年の姿でしょう。

土方稲嶺とは

土方稲嶺(1741~1807)は鳥取藩家老の家臣の家に生まれ、二十代で江戸へ出て朱紫石入門し、当時最先端だった南蘋画風を学びます。四十代頃には、円山応挙、伊藤若冲など、新進気鋭の画家たちがひしめき合っていた京都へと



写真2 稲嶺、稲林らの印章



写真3 「稲嶺」朱文方印(4.2×4.2cm)



写真4 絵画資料

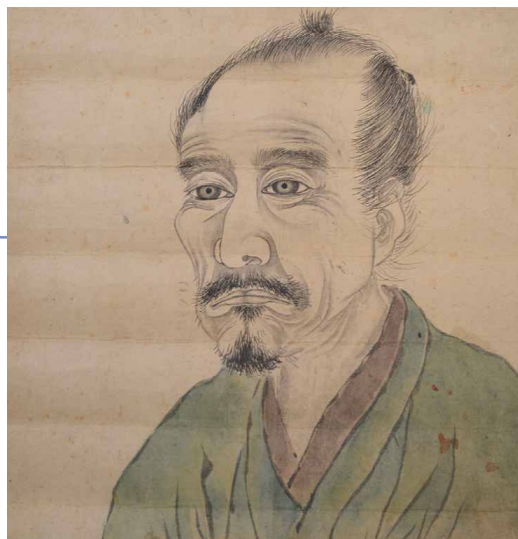


写真1 稲嶺の肖像

拠点を移し、58歳で藩絵師として鳥取藩に召し抱えられました。以後、67歳で没するまで精力的に作品を生み出し続けます。

寄贈資料から新たな稲嶺像に迫る

昨年11月、北海道にお住いの稲嶺ご子孫、杉浦壽さんのご厚意により、伝来していた貴重な資料のほとんどを当館にご寄贈いただきました。資料は、息子の稲林ら稲嶺周辺の画家たちに関係するものも含まれており、前述の肖像画のほか、稲嶺らが作品に用いた印章(写真2・写真3)、下絵・粉本・写生などの絵画資料(写真4)、古文書など計149点に及びます。絵画資料の中には稲嶺その人の手によると判断できる写生帖も確認できました(写真5)。いずれも精緻な描線とグラデーションを駆使して質感を捉えようとする意志が強く感じられ、リアリティ創出に腐心する稲嶺の姿が垣間見られます。新たな稲嶺像に迫るべく、今後本格的な調査、研究を行う予定です。

(美術振興課 山田 修平)



写真5 稲嶺の手によると考えられる写生帖

美術館改修あれこれ

このところ注目すべき美術館の改修の話題が次々に伝えられています。

例えば、公立美術館としては国内で二番目に古い歴史を持つ京都市美術館は、建築家 あおき じゅん 青木淳と西澤徹夫の手によって徹底的な改修が加えられ、つい先日リニューアルオープンしました。展示空間や来場者の導線が一新され、とりわけ西側を深く掘り込んだスロープ状の広場は斬新な空間をつくり出しています。写真に示しているのは、先日、この空間で開かれた たか ぎ まさかつ 高木正勝のコンサートの模様。今後、どのような使い方がされるか楽しみです。整備にあたっては京都市が京セラに 50 億円で命名権を売却し、整備事業の半額を賄うという手法も注目を浴びました。また、これも歴史のある名門、ブリヂストン美術館もアーティゾン美術館と名前を変えて、東京駅近くの巨大なオフィスビルの一角に生まれ変わりました。最新鋭の設備が取り入れられるだけでなく、チケットは完全予約制、多彩なラーニングプランなど新たな取り組みも試みられています。



およそ半世紀ぶりの改修となるこれらの事例を知る時、美術館は時代とともに進化を続けなければならないということが理解されます。令和 6 年度の開館を目指し、鳥取県でも美術館建設が新しい段階に入りました。5 年後に博物館のさらなる進化形としてどのような美術館を皆さんにお見せできるか、おいに楽しみです。

(美術振興課 おさき しんいちろう 尾崎 信一郎)



2024 年度、鳥取県・倉吉に「未来を“つくる”美術館」が生まれます!

『Pass me!』1 号表紙。これから、鳥取県各地を白い箱が旅します。

『Pass me!』は、県民一人ひとりがプレーヤーとなって、さまざまな人へと思いを「Pass」しながら、美術館づくりの足跡を伝えようとするもので、“県民とともにつくる”というスタンスをタイトルに込めています。また、鳥取県のアートを継承していくこと、あるいは、この紙のメディアが手渡しによって徐々に広がっていくことへの期待も、「Pass」という語に重ねています。美術にまつわる情報を「Pass」したり、受け取ったりしながら、より多くの方々と美術館づくりのフィールドを盛り上げていきたいと考えています。

『Pass me!』は県の関係機関やミュージアムネットワーク加盟館等で配架しています。

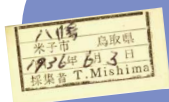
『Pass me!』を発行しています。
—「美術館ができるまで」を伝えるフリーペーパー

令和 6 (2024) 年度の県立美術館開館までに 10 号程度の発行を予定している『Pass me!』は、県民の皆様とともにつくるフリーペーパーです。この冊子の作成・配布にあたって、現在、以下のような取り組みを行っています。

- アートな人、もの、ことをピックアップし、県内 9 郡市を取材する
- 編集に関するさまざまな講座を開催し、県民記者の作成による記事を掲載する
- 「フリーペーパー配り隊!」を募集し、オープンスペースで公開発送作業を行う

誌面に掲載される、記者として参加する、冊子を手配りで広めていくなど、さまざまな関わり方で美術館ができるまでの待ち時間を、一緒に過ごしてみませんか。

(美術振興課 やまもと とおる 山本 亮)



ギンイチモンジセセリの
標本ラベル

コレクションは何を語るのか

～三島寿雄チョウ類コレクションを例に～

博物館の収蔵資料の中には、一人の方が一生をかけて集められたコレクションもあります。例えば当館には、鳥取県有数の昆虫研究家であった三島寿雄氏(1925～2015年)のチョウ類標本が5,000点収蔵されています。これらの標本は鳥取県の自然を知るうえで重要な資料となりますが、コレクションが語ることはそれだけではありません。

右のグラフは、三島コレクションの採集年別の標本数です。最初の標本は1936年(三島氏11歳)に採集したギンイチモンジセセリで、最後は2009年(三島氏84歳)のムラサキツバメです。その期間は実に73年間、生涯をかけた活動であったことがわかります。

1967年から1972年は、年間約300点と極めて標本数が多いです。この点数からは並々ならぬ熱意が伝わってきます。種類もヒメシロチョウ、ヒョウモンモドキ、ウスイロヒョウモンモドキなど絶滅もしくは絶滅寸前のものが多く含まれています。この頃は高度経済成長で開発が進んだ時期であり、目に見えてチョウたちが消えてゆく中、この状況を世間や後世に伝えようと必死に標本を残されていたのではないのでしょうか。



ヒョウモンモドキ(江府町下蚊屋, 1967年7月1日), 鳥取県絶滅種

三島氏は1979年に『大山の蝶(今井書店)』を出版され、長年の調査研究成果をまとめられています。調査が一区切りついたと考えられたのか、それ以降はあまり標本を残されていません。しかし、数が少ないながらも残された標本は自然環境の変化を知るうえで貴重なものばかりです。2007年の64点はすべてクロコノマチョウという南方系のチョウで、それまでは鳥取県では見られなかったものです。最後の2009年のムラサキツバメも南方系のチョウです。晩年も温暖化などの影響によるチョウの変化を観察されていたことがわかります。

このように、一生涯を通じたコレクションからはその人の生き方や考え方をすることもでき、学ぶべきことがあるように思います。

(学芸課 かわかみ やすし 川上 靖)

※鳥取県立博物館研究報告 54号(2017年)にもっと詳しい三島コレクションの紹介と分析が掲載されています。当館HPからご覧いただけます。



ギンイチモンジセセリ
(米子市八幡, 1936年6月3日)

三島寿雄チョウ類コレクションの
年代別の標本数



宇倍神社経塚出土の 経筒について

宇倍神社の経塚、経筒

鳥取市国府町の宇倍神社は、因幡国^{いちのみや}の一宮として現在も篤い信仰を集めています。かつてこの神社の周辺から、経塚が複数見つかりました。経塚とは仏法の教えが廃れるとされた平安時代後期以降、「仏の教えを永遠に…」との願いを込めて、経典を経筒等の容器に納め、土中に埋納したものです。平安時代は神仏混合の時代なので、因幡国の人々から信仰された宇倍神社の周辺には、経塚が集中して築られました。今回ご紹介する経筒はそのうちの一つで、普段は当館の常設展示室に並んでいるので、ご覧になった方も多いでしょう。

経筒は総高 27.7cm、筒部の口径 10.1cm で、傘形の蓋の中央には宝珠形のつまみがあります。蓋をすると蓋の下端が筒の口にぴったりと被さる構造で、とても精巧なつくりとなっています。

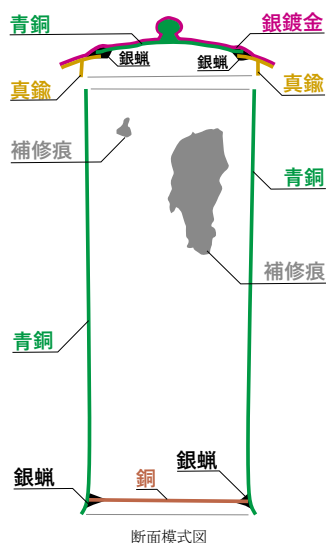
X線CTで構造を調べてみると

最近、この経筒について新知見が得られました。実はこの経筒、令和元年度は7月以降京都国立博物館にて展示されていました。令和元年度に京都国立博物館との間で締結した考古資料相互活用促進事業により貸し出したためです。その間、事業の一環で行う共同研究として、京都国立博物館の分析機器により調査を行うこととなり、今回はその共同研究の調査成果の一部をご紹介します(注1)。

調査は構造を調べるためのX線CTスキャン調査および材質調査のために蛍光X線分析を行いました。その



経筒CT画像(京都国立博物館提供)

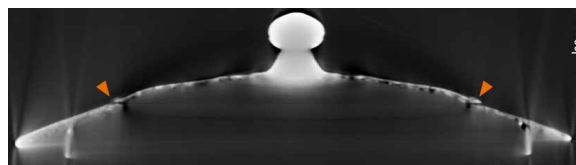


断面模式図



経筒外観

結果、経筒の筒部は青銅製の鋳造品を轆轤^{ちゅうごうひん ろくろ}で厚さ1mm以下にまで薄く削って仕上げられ、底板は円形の銅板を銀蠟^{ぎんろう}で接合していたことが分かりました。



経筒蓋CT画像(京都国立博物館提供) ▼矢印の箇所が銀蠟による接合箇所

面白いのは経筒の蓋です。これまでもこの蓋の中心部分は青銅製であるのに対して、蓋の周縁部分は真鍮製であることは分かっていたましたが、蓋は真鍮製の外周部分の上に青銅製の蓋の中央部を重ね、銀蠟により接合していることが今回新たに分かりました。さらに、いずれの蓋の外表面のみ銀の反応が認められることから、蓋の外表面は銀鍍金(銀メッキ)が施されていたと考えられます。2種類の異なる素材の色の違いを、銀メッキにより統一したのででしょうか。接合痕は一見しただけでは全く分からないほど、精巧に仕上げられているので、こうした具体的な構造が明らかになったのは、この共同研究ならではの成果といえるでしょう。

今後の課題は

では、次にこれがどの時代の所産かという点が問題となります。真鍮は、正倉院宝物の中にも使用例がありますが、一般的には江戸時代以降に広まる素材といわれています。一方で近年は平安時代末以降の真鍮の使用例が徐々に見つかってきていることから、この経筒についても今後、慎重に研究を進めていく必要があります(注2)。

(学芸課 小山 浩和)

注1 調査にあたっては、京都国立博物館の降幡順子、宮川禎一、古谷毅各氏にお世話になると共に、数多くのご教示をいただきました。

注2 間瀬創・松尾篤・角正淳子「短報 三重県津市大宝院所蔵紺紙金字妙法蓮華經における真鍮泥の利用について」『三重県総合博物館研究紀要』No.5 三重県総合博物館2019

「私たちの県立美術館」の動き

美術館と街の大学、学生との連携

鳥取看護大学・鳥取短期大学と鳥取県教育委員会とは、令和元年7月23日に連携協定を締結し、学生の学びの場として県立博物館や令和6年度開館予定の県立美術館を活用したり、運営側に参画できるよう取組みを進めています。

協定締結後の8月初め、さっそく大学の先生や学生のみなさんが当館を訪れ、館内見学や夏休み企画展「アートとの遭遇」展や武蔵野美術大学学生によるワークショップの様子を観覧し、意見交換を行いました。

また、12月には、当館の美術コレクションを大学に持ち込み、鑑賞授業を行いました。版画や彫刻、工芸作品を間近で見たり触って確かめたりして、本物の存在感を感じるとともに、お互いの対話により「いろんな見方ができる」「それぞれ感じ方が違っていても面白い」といったことを学生や先生方と共有しました。

令和2年度は、大学内にある作品も使った鑑賞授業や幼児教育に関する講義を行う予定で、学生と一緒にアートのワークショップを企画・運営することなども検討しています。



「コレクション宅配便」による鑑賞授業の様子(令和元年12月)

県立美術館開館後は、美術館のある街の大学として、美術館の空間や作品を活用した授業、創作発表の場、そして運営ボランティアとしての活躍を大いに期待しています。

なお、県では、美術館整備局を4月から倉吉市(倉吉未来中心内)に設置し、地元と連携しながら開館に向けた準備を進めていきます。

県立美術館に関する情報は、こちらのホームページをご覧ください。
<https://www.pref.tottori.lg.jp/museumofartpreparatoryroom/>

(美術館整備準備室 石原 理絵)

お知らせ

キャッシュレス決済できます！

2019年10月から、当館の入館料の支払いに各種クレジットカード、交通系ICカード、電子マネーが使用できるようになりました。

※電子マネーへのチャージはできません。ご了承ください。

【クレジットカード】

JCB、VISA、MasterCard、AMERICAN EXPRESS、銀聯(Union Pay)、Diners Club、DISCOVER

【電子マネー】

Apple Pay、Google Pay、QuickPay、楽天Edy、WAON、nanaco

【交通系ICカード】

Suica、PASMO、Kitaca、toica、manaca、ICOCA、SUGOCA、nimoca、はやかけん

ミミトピック

中国 河北省で因州和紙の展覧会を開催！

当館と中国 河北博物院が1998年に友好交流館協定を締結してから、両館は隔年で職員を相互派遣し、フォーラムやワークショップを行うなど友好交流を重ねてきました。2018・2019年度は交流20周年を記念して、相互に展覧会を開催し、2018年度は河北博物院所蔵の「武強年画」「蔚県」の切り紙、唐山皮影芝居」を当館で展示しました。

2019年度は当館所蔵の民芸品、因州和紙やその歴史を河北博物院で展示・紹介しました。因州和紙の板締めワークショップは中国の方々大変好評でした。



鳥取県立博物館ニュース No.29

令和2年(2020年)3月27日発行

編集・発行 鳥取県立博物館

住所 〒680-0011 鳥取市東町2丁目124番地

TEL 0857(26)8042(代)

FAX 0857(26)8041

URL <https://www.pref.tottori.lg.jp/museum/>

E-mail hakubutsukan@pref.tottori.lg.jp



facebook 「いいね！」をお願いします。



- 入館料：常設展／一般180(150)円
()内は20名様以上の団体料金
- 開館時間：9時～17時(入館は16時30分まで)
19時(入館は18時30分)まで開館する場合あり。詳細はお問い合わせください。
- 休館日：毎週月曜日(祝日の場合は翌平日が休館日)
国民の祝日の翌日(土、日、祝日の場合を除く)
年末年始(12月29日～1月3日)
※具体的な休館日等は、ホームページでご確認ください。



- JR鳥取駅からバスで
- ①100円バス「くる梨」緑コース「①仁風閣・県立博物館」下車すぐ
- ②ループ麒麟獅子「②鳥取城跡」下車すぐ
- ③砂丘・湖山・賀露方面行「西町」下車、約400m
- ④市内回り岩倉・中河原方面行「わらべ館前」下車、約600m
- JR鳥取駅からタクシーで…約10分
- 鳥取砂丘コナン空港から…鳥取駅行連絡バス「西町」下車、約400m
- お車で…鳥取自動車道・鳥取ICまたは鳥取西ICより約15分
※当館駐車場21台駐車可能・満車の場合は県庁北側駐車場[無料]へ

お客様の満足の「3」へ…
MORRIX
 株式会社モリックスジャパン
 TEL 0857-23-3641
 本社 鳥取市南町203-6
 倉吉店 倉吉市下田中町870 中瀬ビル3F
<http://www.morrix.co.jp/>

We Find the Way

日本通運
 NIPPON EXPRESS
 鳥取支店 0857-28-0202